

令和2年度「関係人口創出・拡大のための中間支援モデル」

## 地域に関わる多様な入口づくり



にいがたイナカレッジ



# 1. 事業概要

## 【目指すもの】

地域に共感して、一緒に汗を流して一緒に活動する  
“多様な担い手”を増やしたい。

—過疎化が進んでもその地域に関わる人や応援してくれる人（共感者）がいて、それによって地域の人たちが「自分たちの暮らす地域は価値あるものなんだ」「まだまだ頑張れる」という前向きな気持ちで地域づくり活動に取り組む地域・人を残していきたい。

—都市に暮らす若者等にとって、農村地域の人や暮らしに触れることで様々な価値観に出会い、自分に合った“活き方”を見つけるきっかけを作りたい。

### 【既存】お米レター

概要：県内一人暮らし学生を対象に、農村地域からお米と手紙を発送し、受け取った学生から農家にお礼の手紙を送り返し、料理の写真SNSで発信。その後お礼・お手伝いツアーを実施。

### 【既存】ツアー型地域づくりプログラム

概要：都市部に暮らす人々を対象に、地域の具体的なプロジェクトに関わり、メンバーの一員となって一緒に地域づくり活動を実践するプログラム。

### 【既存】1か月農村農村インターン

概要：若者の学び・成長×地域活動の促進・前向きな変化を目的に、大学生が1か月間地域に滞在し、具体的な地域づくり活動を実践する地域づくり型農村インターンシップ。

### 【既存】アグリバス

概要：地域農業の担い手の育成に向けて、月の半分を野菜農家でのお手伝い、残りの半分を集落の暮らしと米づくりを学ぶ、1年間のライフスタイル型就農プログラム。

地方に関わる  
きっかけづくり

日帰り・数日型  
プログラム

通い型  
プログラム

短期滞在型  
プログラム

長期滞在型  
プログラム

## 《本事業で実施する取組》

### 地域に関わる多様な入口づくり

特にこれまでイナカレッジでは、1か月や1年間地域に滞在する“ガッツリ系”のプログラムが主流であったため、本事業では、「きっかけづくり」や「日帰り・数日型」などライトなプログラムを開発し、地域に関わる多様な入口づくりを進めていく。

#### オンラインプログラム

目的：実際に地域を訪れなくても、地域との関わり方を考える場・つながるきっかけを提供し、「地域に行ってみよう」喚起と、より深く関われるプログラムへの誘導。

内容：これからの働き方・暮らし方、都市での暮らしの違和感（モヤモヤ）などを言語化・共有しつつ、地域での暮らしや関わりについて考える「はたらくらすラボ」、地域の特産品等を活用したオンラインワークショップ「つながる暮らしレター」など、地域に関わるきっかけを提供するオンラインプログラムを開発。（参加者50人）

#### おてつだいPlus

目的：地域のお手伝い+αのプログラムを通して、参加者の地域への共感を育む。

内容：農作業の繁忙期、集落行事や共同作業など、半日～数日程度の地域で人手が必要な場面のお手伝いを通して、地域の魅力を感じるプログラムの開発。（100人日派遣）



#### 関係人口コーディネーターOJT研修

目的：関係人口コーディネーターの育成

内容：実践活動を通じてプログラム設計やコーディネートポイントなどの共有。テキスト作成。（研修参加10人）



#### 【私たちが目指す関係性】

関係性は“共感”によって生まれるもの。

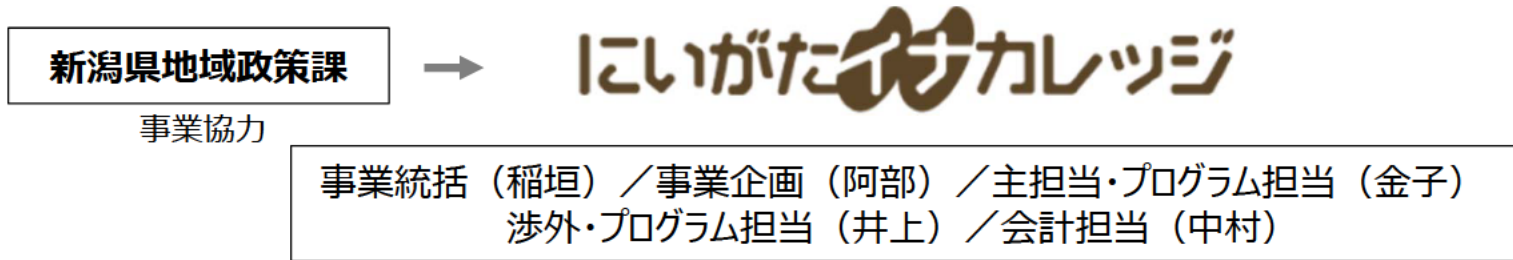
共感＝一緒に過ごす時間×かいた汗の量  
（共通体験）

#### 存在承認の関係性

「〇〇さんに会いに行きたい」

「〇〇ちゃんが来てくれて嬉しい」

# 実施体制



NPO法人ツルハシボックス  
 オンラインプログラム企画、実施サポート

	にいがたイナカレッジ	新潟市南区 (都市近郊農村地域)	出雲崎町 (農漁村地域)	村上市山北地域 (山村地域)
オンラインプログラム (はたらくらすラボ)	○			
オンラインプログラム (つながる暮らしレター)	○		○	
おてつだいPlus	○	○ 果樹農家等のお手伝い	○ 集落・団体等のお手伝い	○ 集落のお手伝い
関係人口に関わる人づくり	○	○	○	○

## 2. 活動内容

## おてつだいPlus～多くの人に参加しやすい・受け入れやすいプログラムづくり

参加しやすい・受け入れやすい半日～数日型のプログラムとして、地域のちょっとした人手が必要な場面にヨソモノが加わり一緒に汗を流す、“お手伝い”という関わりしろから、地域の共感・関係性を育むプログラムを開発する。

地域からは、“一緒にご飯を食べる”“ハネモノなどをお土産として渡す”など、お手伝いのお駄賃として“お金ではない価値”を提供し、“労働と対価”ではない関係性づくりに努める。

同時に地域に共感が生まれるポイントは何か？ どのような場面で共感が生まれるのか？を明らかにする。

### Type1. 農家のお手伝い

- 【時期】 9月～12月
- 【地域】 新潟市南区
- 【受入】 8農家／19回のお手伝い
- 【参加者】 延べ44人（新潟市内在住）
- 【作業内容】ルレクチェ、ナシ、ブドウなどの収穫・出荷作業、など
- 【お駄賃】 お土産（ハネモノ）、ご飯を一緒に食べる（話をする）、など

### Type2. 地域のお手伝い

- 【時期】 10月～11月
- 【地域】 出雲崎町、村上市山北地域
- 【受入】 4地域／7回のお手伝い
- 【参加者】 延べ41人（新潟市、長岡市、柏崎市、小千谷市）
- 【作業内容】蔵の掃除、野菜の収穫、公会堂の掃除、空き家の掃除、など
- 【お駄賃】 ご飯を一緒に食べる（話をする）、まち歩き、お土産、地域文化に触れる機会



## おてつだいPlus～多くの人に参加しやすい・受け入れやすいプログラムづくり

---

### 農家のお手伝い

#### (参加者)

- ・農家さんと知り合いになれたこと、農作業が経験できたこと、食べきれないほどのお土産をもらったこと、などがプログラムの満足度に繋がっていた。
- ・リピートする参加者が多く（参加ニーズが高く）、逆に受入農家の開拓に苦慮。
- ・農家と連絡先を交換し、コーディネーターを介さず直接連絡を取り合ってお手伝いに行く例も見られた。

#### (農家)

- ・単純に労働力として喜ばれた（8軒中6軒）「来年、使っていない離れを宿泊場所として使っても良いよ」という声も。
- ・若い人たちとの交流機会に価値を感じる声も挙げられた。一緒に商品開発してみたいなどの要望も。
- ・一方で、農作業のお手伝いとして充てにするのであれば、同じ人に一定期間来てほしいという声も。  
（ただ現実的には、平日は授業や仕事を抱えているため、土日中心にならざるを得ない）
- ・手伝いだけであれば高校生のアルバイトと同じ。大学生・社会人であればもう一段上の取組が出来ないかという意見も。

### 地域のお手伝い

#### (参加者)

- ・地域住民との交流、地域の面白いプロジェクトを知れたこと、地域の風土に触れたりできたことに対して高い満足度。
- ・お手伝い参加者が、その後地域のイベントに参加するなどの関係性が生まれた。
- ・その後も地域を訪れたいというニーズがあったが、新型コロナウイルス感染症拡大にともない見送ることに。
- ・プログラムに参加したことで地域への愛着が生まれ、R3年度に実施予定の1か月間の農村インターンシップに参加表明。

#### (地域)

- ・お手伝い（作業）ということよりも、地域外の若い人たちに関わってもらえることに価値を見出す意見が多かった。
- ・次年度はより本格的な若者の受入に取り組みたいという声も。（R3年度夏に1か月間のプログラムを実施することに）
- ・カメラを趣味とするお手伝い参加者に、その後地域から仕事を依頼。
- ・これまでお手伝いに来てくれた人を対象に、地域で感謝祭を企画（春先に開催予定）。
- ・次年度から地域おこし協力隊を受け入れることになった。（活動のイメージが湧いた）

## オンラインプログラム～地域に興味のある若者等とのネットワークづくり

都会の暮らしに違和感を感じていたり、言葉に出来ないモヤモヤを抱えていたり、それによって地域に関心を寄せる若者に対して、恒常的なつながりをつくるツールとして、オンラインを活用したプログラムを開発する。

また、コロナ禍にあって首都圏を中心に、県外の若者が農村地域に訪問しなくても、関係性を築き地域の空気が感じられるオンラインプログラムを開発する。

### はたらくらすラボ

～イナカレッジと若者等とのつながりづくり～

- 【時期】 8月～1月（全5回+1回）
- 【開催】 19:00～21:00（主に平日）
- 【参加者】 延べ62人（主に首都圏）
- 【対象】 都会の暮らしに違和感を感じ、自分に合った生き方・働き方を模索する25歳以下の若者
- 【テーマ】 ゲストの話を聞きながら、地域での暮らしや地域との関わり方を紹介し、今の暮らし・働き方から感じる違和感等を参加者同士で言語化・共有。その上で地域のプログラムなどを紹介。
- 【内容】
  - ・ゲストトーク  
（イナカレッジのプログラムを通して地域と関りを持ったり、定住した若者）
  - ・グループに分かれてのキーワードトーク
  - ・感想、まとめ

### つながる暮らしレター

～オンラインで地域の雰囲気を感じる、つながる、「行ってみたい」を喚起する～

- 【開催】 1月17日(日)
- 【連携地域】 出雲崎町（磯野紙風船製造所、地域おこし協力隊）
- 【参加者】 7人（ほぼ県外）
- 【内容】 事前に参加者に紙風船を郵送し、オンラインで紙風船のデザインワークショップを実施。出来上がった作品は、観光協会が主催する「紙風船デザインコンテスト」に応募。





## オンラインプログラム～地域に興味のある若者等とのネットワークづくり

---

### はたらくらすラボ

- ・当初は、イナカレッジと都市部の地方に興味がある若者がつながる手法として「はたらくらすラボ」を考えていたが、実際の参加者の感想などをうかがうと、今の暮らし、働き方、言葉に出来ないモヤモヤ感など、本当に色々なことに悩んだり違和感を感じている若者の姿が多く見られた。
- ・このような人たちにとって、地域との関わりを通して自分の暮らしのモノサシを見つけたゲスト（イナカレッジインターン生OBOG）の話は心に響くものがあったと感じられた。少しでもモヤが晴れたり、気持ちが楽になる、そんな場として「はたらくらすラボ」が機能していた。
- ・地域に興味のある若者とのつながりづくり、コミュニティづくりということが、オンラインでも出来るという手応えを感じた。
- ・“地域に関わるきっかけづくり”ということと合わせて、これからの生き方を考える場として、「はたらくらすラボ」は続けていく必要がある大事な取組だと実感した。

### つながる暮らしレター

- ・当初は、“農村の暮らしが実感できる届け物（米や野菜等）”を手紙と一緒に参加者に郵送し、参加者からお礼の手紙を送り返してもらい、且つオンラインによる交流会やワークショップを開催するプログラムとして実施する予定であった。
- ・しかし具体的にプログラムを企画する段になった際、オンラインに不慣れな地域の方と都市部の若者が、初対面がいきなり画面越しということの難しさ、オンラインで参加者にとっても地域にとっても満足度が高く意味のあるプログラムを再度検討した結果、出雲崎町の紙風船を題材にしたオンラインワークショップを開催。作品は道の駅で展示されるため、プログラム終了後の地域訪問の動機づけになることを期待。
- ・紙風船ワークショップは参加者の満足度が高く、出来た作品を町観光協会主催「オリジナルデザイン紙風船コンテスト」にエントリーする参加者も見られた。
- ・オンラインを活用して、地域にとっても参加者にとっても満足度が得られ、意味のあるテーマ設定に非常に苦慮。（参加者にとって満足度の高いプログラムは作れるが、それが地域にとって実感をともなう意味のある内容にする、且つオンラインプログラムへの参加を機に、地域に訪問する導線を描くことが非常に難しいと感じた）

# 関係人口に関わる人づくり

「おてつだいPlus」「つながる暮らしレター」の実践をOJT研修と位置づけ、実施地区（新潟市南区、出雲崎町、村上市山北支所）の行政職員や地域おこし協力隊、地域づくり団体などと一緒にプログラムの企画段階から協議・検討することで、関係人口の考え方、プログラム設計やコーディネート手法等の共有を図る。

あわせて、本事業の成果・課題、これまでのイナカレッジの取組などから得た教訓などをとりまとめ、関係人口に関わるテキストを作成。

## OJT研修

- 当初の想定は、地域住民・団体等を巻き込み議論しながら、プログラムを企画・設計・実行し、この中でそれぞれの地域における関係人口の考え方や手法などを検討・共有する予定であった。
- しかしいずれの地域でも新型コロナウイルス感染症拡大により、プログラムの開催頻度が減ってしまったり、地域住民・団体等を巻き込むことが難しく、結果としてイナカレッジが聞き取った地域の要望等に基づき、一部行政職員や地域おこし協力隊等と協議しながらプログラムを設計することとなった。このため当初想定していたようなOJT研修というようなイメージとはかけ離れていった。
- 一方、行政職員等とは密な連携がとれ、考え方などを共有できたことで、次年度以降の協力・連携体制が構築できた。



## 関係人口テキスト作成

【概要】 「共感から生まれる、関係人口」（全48頁）

はじめに

1. 関係人口とは
  - (1) にいがたイナカレッジの取組
  - (2) 地域づくりの段階
  - (3) 地域づくりにおける関係人口の役割
  - (4) 地方を求める若者のタイプ
  - (5) イナカレッジが目指すもの
  - (6) 関係人口をつくる「場所」と「場面」
2. 関係人口を増やすための場所づくり
  - (1) よそ者を受け入れる3種類の関わりしろ
  - (2) よそ者を受け入れる効果
  - (3) 地域づくり型プログラムの注意点
  - (4) イナカレッジは、あくまでも地域の入口の一つ
3. 関係性を育む場面づくり
  - (1) 関係性とは
  - (2) 関係性を育みやすい規模感と受入体制
  - (3) 結果よりも大事なプロセス
  - (4) コーディネーターの役割
4. よく聞かれる質問（Q&A）
5. おわりに

※現在印刷中。2月中に県内市町村に発送（予定）

## 成果検証・KPI

	目 標	達成状況
1	<b>参加者の意識変化・今後の意向把握</b> 一本事業参加者のうち、今後も継続的に地域と関わりを持ちたい（同様の取組に参加したい、さら深く地域に関わるプログラムに参加したい）意向を示す若者等の数：30人	52人
2	<b>受入側の意識変化・今後の意向把握</b> 一本事業を実施したことで、次年度以降若者等の受入に取り組む意志のある集落・農家・事業者等（次年度以降の関係人口受入体制）：10	10
3	より多くの人に参加しやすい・受け入れやすいプログラムの開発 ・おてつだいPlus 参加者数：100人日 ・次年度以降「おてつだいPlus」の受入体制：10（集落・戸・社）	・参加者：85人日 <small>※新型コロナウイルス感染症の拡大により、1月・2月に予定していたプログラムが中止に。</small> ・受入体制：10
4	地域に興味がある若者等の人材ネットワークづくり ・オンラインプログラム参加者：延べ50人 ・地域に興味がある若者等のネットワーク（直接連絡のやり取りができる新たな若者等の数）：100人	・参加者：延べ69人 ・ネットワーク：74人 <small>※いずれのプログラムもリピーターとなる参加者が多く、実人数としての目標に達しなかった。</small>
5	関係人口に関わる人づくり ・OJT研修への参加：10人	6人

## イナカレッジとしての気づきや手応え①

---

### ◇多様な地域の入口づくり・関わりの階段づくりへの手応え

- 本事業をとおして、今後も地域に関わりたいとする52人の若者とのつながりを持つことができた。
- この52人のうち、より本格的（長期的）なプログラムに参加したいとする若者も見られ、次年度以降のイナカレッジのプログラムへと誘導することが可能に。
- つまり、日帰り型など気軽に参加できるプログラムを実施することで、その後本格的なプログラムへと誘導することもでき、イナカレッジとして①地域に関わる多様な入口づくり、②地域と深く関わるスムーズな階段づくり、への手応えをつかむことが出来た。

### ◇地域への最初の一歩としての「おてつだいPlus」の可能性

- 参加者からは予想以上に“農家さんとの交流”や“一人では食べきれないほどのお土産”等に高い満足度が得られ、プログラムの価値として大きな手応え。また、受入側も8農家中、6農家が次年度も受け入れたいという意向。
- 一方で課題も。学生が一番動ける時期（アンケートから9月）にお手伝いを出来るだけ集約し、関係性構築を図る。これができると、繁忙期（収穫であれば10～12月）にも、行ける範囲で手伝いに行く関係性になる。
- 農家の考え方や作業内容など、おてつだいPlusの仕組みには、受入農家の“向き・不向き”があり、改めて受入農家を設定し直す必要がある。
- 日帰りプログラムで参加ニーズが高いため、開催頻度を上げる必要があるが、その際に、現地までの足の問題（基本的に公共交通では行きにくいところがほとんど）、日程調整をはじめとする各種調整機能の強化、学生だけでなく若手社会人（移動手段がある）へのアプローチなどが必要。

### ◇オンラインプログラムの難しさ・位置づけ

- イナカレッジと都市部の若者がつながるツールとして、オンラインプログラム（はたらくらすラボ）の可能性を感じることもできた一方で、オンラインで直接地域と若者の関係性を築くことの難しさも。あくまでも地域を訪れるプログラムへの参加の呼び水という位置づけとしてオンラインプログラムを捉える必要があると感じた。
- 逆に言えば、地域を訪れて活動する具体的なプログラムを持ち合わせていないと、オンラインプログラムの効果をどこに求めるべきなのか！？（他のオンラインプログラムの事例を勉強させてもらいたい）
- 例えば一度でも地域とのつながりを持っている人が、オンラインを活用して交流することはできるが、オンライン上で“はじめまして”の状態から、地域と若者の関係性を築くことは非常にハードルが高いと感じた。

## イナカレッジとしての気づきや手応え②

---

### ◇OJT研修の手応え

- 本事業では、「おてつだいPlus」「つながる暮らしレター」などの実践をとおして、行政職員や地域おこし協力隊、地域づくり団体の方などと一緒に、それぞれの地域に応じた関係人口の考え方や手法などを議論・共有することとしていた。
- 新型コロナウイルス感染症の拡大にともない、当初の想定どおりには進まなかったものの、一方で「おてつだいPlus」の実施回数が多かった（コロナの影響に大きく左右されなかった）新潟市南区では、プログラムの企画や受入農家の開拓段階から行政職員の方と議論しながら進められたため、関係人口の考え方やプログラム設計、実施する上での課題などを共有することができた。
- 同時に「おてつだいPlus」の成果・手応え（地域への影響等）も共有できたため、次年度以降同じ目線で一緒に取り組める連携・協力体制ができ、本事業では、規模感としては当初の想定を下回ったものの、OJT研修の効果・手応えを感じることができた。

### **3. 自立化・自走化への展望**

## 自立化・自走化への展望

	おてつだいPlus	オンラインプログラム	人づくり
実施体制・プログラム	<ul style="list-style-type: none"> <li>・基本的には、今年度と同様のかたちでプログラムを次年度以降も継続。</li> <li>・ただし、受入先は経営作物や経営規模、繁忙期等を踏まえて再検討。</li> <li>・運営に関わりたいという学生も数名あられ、事務局の調整事務軽減を図るためにも学生コーディネーターを確保・育成（1農家-1学生のコーディネーター体制づくり）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・オンラインプログラムの目的・ねらいの再設定が必要。</li> <li>・イナカレッジとしては、オンラインで直接地域と若者をつなぐということではなく、中間支援組織と若者のネットワーク化を目的にプログラム（「はたらくらすラボ」など）を継続。</li> <li>・「つながる暮らしレター」は、参加者の満足度、地域側の実感、その後の来訪への導線など、様々な要素を満たすテーマ探しを関係者と一緒に行う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「おてつだいPlus」やその他のプログラムを通して、関係者と一緒に議論しながら実践することで、関係人口の考え方や手法などについて共有を図る（OJT形式の継続）。</li> <li>・新潟県が実施する「地域づくり実践塾OJT研修」の一環として、関係人口に関わるコーディネーター育成について県と協議。</li> </ul>
運営費用	<p>実費：受益者負担（交通費等） 運用：公的資金（現在新潟市では、市予算、区のみちづくりサポート事業の活用などを検討、出雲崎町では地域おこし協力隊に係る経費、中山間地域等直接支払制度の活用などを検討）</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「はたらくらすラボ」は実費はほとんどかからないので、既存のイナカレッジプログラムの応募促進活動の一環（営業費）として実施。</li> <li>・「つながる暮らしレター」は、実費を受益者負担、運用は公的資金を活用。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「おてつだいPlus」やその他のプログラムの実施費用のなかで、取り組む。</li> </ul>
課題と対策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・足の問題は、新潟市南区で実施している乗り合いタクシーとの連携（最寄り駅から農家までの送迎）を図ることで、関係課と協議。</li> <li>・宿泊可能な滞在拠点として、農家さんの敷地内の離れの活用を試験的に実施するほか、中期的には空き家（既に何件かピックアップ）を活用した滞在拠点を確保。</li> <li>・今年度は参加者の多くは県内大学生であったが、次年度以降は若手社会人へのアプローチを強化。</li> </ul>	<p>（はたらくらすラボ）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・リピートする参加者が多く、コミュニティ化が図られる一方で、蛸壺化しないようにするためにも、新規開拓が必要。</li> <li>・プログラムの性質上、有料広告を使えば参加者が集まるといようなものではないので、つながりのある大学の先生の協力、参加者の口コミ（情報拡散依頼）などを図りながら、新たな参加者の確保に努める。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・講義研修なども考えられるが、その効果は受講する人の当事者意識によるところが大きいと考える。</li> <li>・逆に当事者意識があれば、講義型の研修でも一定の効果が得られるのではないか!?</li> </ul>

## **4. 他地域への横展開の可能性**



## 他地域への横展開の可能性

### 【前提】

- 関係人口の考え方や手法は多様であるが故に、他地域で同様の取組を実施する場合、具体的なプログラム設計や運用などの“手段”を検討する前に、実施する地域において、外部の人たちとどのような関わりを作り、それによってどのように地域づくりを進めていきたいのかという“目的”と、その手段として「おてつだいPlus」や「オンラインプログラム（つながる暮らしレター等）が適切なのかを見定めることが重要と考える。
- その上で、理想としては一つのプログラムを単体として考えるのではなく、深く地域に入っていくための関わりのステップ（地域への階段）を描いたうえで、おてつだいPlusやオンラインプログラムなどの一つひとつのプログラムを位置づけた方が、効果的な関係人口づくりにつながると思える。

	おてつだいPlus	オンラインプログラム
事業スキームプログラム	<ul style="list-style-type: none"> <li>・受入先が農家の場合、事前に趣旨などを丁寧に説明しないと、単なる“人足”として捉えられてしまう可能性がある。</li> <li>・また“労働と対価の関係”にならないようにするために、+αの共感要素を必ずプログラムに組み込む。</li> <li>・受入先が地域・集落の場合、“もてなす”にならるように注意が必要（“交流疲れ”の二の舞）。関係人口をつくるために作業を用意するのではなく、地域・集落で人手が欲しい時期にあわせてプログラムを企画する。</li> <li>・現地までの足の確保が課題となる（金銭的な問題というよりも、そもそも現実的に公共交通では行けないという地域も多い）。年数回程度の頻度であれば良いが、毎回コーディネーターが現地に連れていくかたちは継続が難しい。</li> <li>・いずれにしてもそれぞれの地域の実情に即したプログラムづくり・カスタマイズが必要と考える。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・オンラインプログラム単体で考えるのではなく、実際に地域を訪問し活動できるプログラムとセットで実施することでプログラムの効果が発揮される。（つながる暮らしレター）</li> <li>・恐らく参加者の満足度をあげるプログラムを企画するのはそんなに難しいことではないが、同時に地域にとって意味のある内容、地域の人たちにとって手触り感がある内容にするとともに、参加者がその後地域を訪問する動機（導線）づけなど、様々な条件を満たすプログラムづくりが必要であり、企画力が問われる部分。</li> <li>・中間支援組織と都市部の人とのつながりづくりと考えれば、だいぶ気は楽になる。</li> </ul>
連携先・地域	<ul style="list-style-type: none"> <li>・行政の積極的な関わりは必須。</li> </ul>	
課題と対策	<p>【費用】参加者負担、受益者負担で費用を確保することは必要であるが、現実的には実費程度。市町村予算、中山間地域等直接支払など、一定の公的資金の活用・参加費等との組み合わせを考える必要があると考える。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・単に“オンラインで交流しましょう”では、参加者にとっても、主催者にとっても、地域にとっても実施の意義が見いだせなくなり継続が難しくなるので、オンラインプログラムの位置づけ（目的）を明確化・共通認識を持つ必要がある。</li> </ul>

# イナカレッジとしての関係人口の考え方の整理

【目指すもの】

**地域に共感して、一緒に汗を流して一緒に活動する、地域の“多様な担い手”を増やしたい。**

## 【地域にとって】

過疎化が進んでもその地域に関わる人や応援する人（共感者）がいて、それによって地域の人たちが「自分たちの暮らす地域は価値あるものなんだ」「まだまだ頑張れる」という前向きな気持ちで活動に取り組む地域・人を残していきたい。

## 【地域に関わる若者等にとって】

農村地域の人や暮らしに触れることで、様々な価値観に出会い、自分に合った“活き方”を見つけるきっかけを提供したい。

【関係人口をつくる要素】

## 場所 × 場面

(地域に入っていくきっかけづくり)

(関係性を育むきっかけづくり)

【イナカレッジのプログラム】

### ○お手伝い型プログラム

(半日～数日型)

地域の「ちょっと人手が欲しいな」という時にお手伝いに行くという分かりやすさ、受け入れ易さ。

### ○地域づくり型プログラム

(週末通い型～1か月間)

これから地域としてこんな取組をやっていきたい！に対して一緒に汗を流して実行。(課題解決なんていう大それたものではない)

### ○学び(研修)型プログラム

(1年間)

地域に“暮らしてみたい”若者を対象に、地域の人たちが先生となり、農村で暮らすための知恵や業を学ぶ研修プログラム。

## 直接的効果

「収穫作業を終えることができた」

「地域をPRする冊子ができた」

など、プログラムを通して完成する作業や成果物

## 副次的効果

「地域の雰囲気明るくなった」

「地域の若者が活動に参加してくれるようになった」

など、よそ者が地域に入ったことでの様々な変化

## 関係性 = 地域への共感

《人の魅力》

《暮らしの魅力》

《コミュニティの魅力》

【関係を育むポイント】

○一緒に過ごす時間×一緒に流した汗の量(共通体験)

○顔と名前が一致する規模感

○1対大勢の受入体制(過疎なのに人まみれ)

○関係性の深まりのプロセスを描く

## 存在承認の関係性

「〇〇さんに会いに行きたい」

「〇〇ちゃんが来てくれて嬉しい」

## コーディネーターの役割

◇プログラムの成果を導くためのコーディネート

◇関係性を育むためのコーディネート